

絆むすんで

原爆投下で家族を亡くした子どもたちが暮らした広島戦災児育成所の育成日誌は、子どもたちが心の平静を取り戻していく過程と、献身的に支えた教職員の姿を綿々とつづる。一瞬にして社会との絆を原爆に奪われ、ゼロから出発した集団生活。「家族」の再生にもがき、泣きも笑いもした人々の姿を追う。

一九四八年二月三十一日 食を共にした。しつけや勉の育成日誌は、筆運びが弾強に心を砕いた。内からはねおきて二年生のページをめくりながら六十子供達がさっさと庭をはいりある(中略)はち切れそな姿に(中略)たのもしく思った」

そう書いたのは、広島市南区の岩見(旧姓菊池)真朝(現広島市佐伯区)に砂子さん(79)。広島県五日市町(現広島市佐伯区)に

は病院事務員の父とともに朝鮮で暮らし、現地の小学校で二万月半、教壇に立つた。戦後の引き揚げの途上、各地に広がる焼け野原は衝撃だった。「日本の復興は

よみがえる日々

教員・母として寝食共に

りだったという。子どもたち自由記述の「所感」欄。ちが寝静まった深夜、パン火鉢のふちに足を乗せる子を執る。クリスマスや合唱会などの行事や、三食の献立をつらつらと書き込んだ。クラスごとの宿舎で鍋をつついたのが楽しい思い出。自然と誰もが「家庭会食」と呼んだ。

職員が扮したサンタクロースを、子どもたちは薄目で待った。「健やかで幸多

き事を祈らずに居られなかつた」(四十七年十二月二十四日)

「教員、母親としての心構えを教わった」という育成所勤務。橋渡しをしたのは、姉、み津子さんだった。姉は終戦当時、県立広島女専(現県立広島大)の学生だった。妹より一足早い四六年夏の二万月半、育成所で働いた。だが四九年、二十三歳の若さで結婚で亡くなった。

育成日誌とは別に、姉も子どもたちとの触れ合いを記録していた。育成所を創設した故山下義信氏は、その遺稿を「菊池女子大学生」という題名で編んだ。

四六年八月二十七日、姉はこう記している。「この町が、この日本が、立ち上がるのは何時か。それは育

成所の子供が大きくなった時(中略)はじめて明るくたちなおる」

じっくり話聞く

姉から妹へと、教育への情熱は受け継がれた。岩見さんは育成所を離れた後、広島市内の小学校で約四十年間、教壇に立った。児童がいたすらをしても頭ごなしには怒らず、じっくりと話を聞いた。それが、育成所で学んだ経験則。「子どもは寂しいと、いろんな信号を発してくる」

岩見さんは六日、東京から来る孫の謙太郎君(10)を原爆の爆心地近くに連れていくつもりだ。「同年代の子どもたちが、どのように



「思い出がよみがえってきました」。懐かしそうに育成日誌のコピーをめくる岩見さん (撮影・浜岡学)

初めて話してみよつと思っ

(下久保聖司)